

5年後の自分へ

2022.2.16

年が明けて、1月4日のことだった。この日は、仕事始めの日だった。初出勤を終え、毎日降り積もる雪と除雪がされない道路に難儀しながら家にたどり着いた。郵便受けを確認した。すると、年賀状とともに一通の封書があった。宛名は手書きで女性の文字のようだった。裏を見ると、差出人の名前があった。その名前には見覚えがあった。

今年、成人式を迎えた長女の中学3年生のときの担任の先生だった。成人式を前にして、何かメッセージでも送ってくれたのかと思った。娘に「〇〇先生からだよ」と渡した。

私の予想はずれた。封書の中身は、「5年後の自分へ」だった。娘の話では、中学3年生のとき、卒業式の2日前に書いたそうである。書き終わり、封筒の宛名も自分で書いたそうである。だから、手書きの女性のような文字だったのである。自分で封もしたとのことだった。

ということは、担任のI先生は、娘たちが中学校を卒業した後も5年もの間、ずっと30通の封書を大事に保管してくれていたということになる。1月9日の成人式を前にして、1月4日に届くように郵送してくれたのだろう。お正月に発送の手配をしてくれたことになる。ありがたいことである。自分で自分にあてた手紙が5年後に届くのである。素敵なドラマである。

I先生に感謝しながら、自分のことを振り返った。中学3年生を担当したときに、どんなことをしてあげただろうか。「5年後の自分へ」という企画はやったことがない。学級通信を製本して渡したことは覚えているが、それ以外という思い浮かばない。だが、何かしらはやっているはずである。

中学3年生を担当する先生方は、卒業の時期になると、あれこれと考えるはずである。最後に何ができるだろうか。何をしてあげられるだろうか。それは、野田中学校の先生方も他の中学校の先生方も同じであろう。その企画に、その先生ならではの持ち味が出る。どれがよくて、何がよくないということではない。

家人が帰ってきた。I先生から封書が届いたことを知らせた。家人は、さほどのためらいもなく娘に「見せて」という。私は驚いた。娘も驚いた。私は、気を使って、そんなことは言わなかった。

「普通、こういうときは、親は読まないでしょう」と思いながらも、気にはなっていた。結局、娘が家人に見せたので、便乗して私も見せてもらった。そこには、卒業を間近に控えた中学3年生の素直な気持ちが綴られていた。思いが込められた文面はいいものである。

今年度の卒業式は、3月11日（金）である。これから、担任の先生方の持ち味を生かした思いが込められた企画が始まることだろう。そこには、中学校を旅立つ生徒たちの思いが込められるはずである。今年も、いい時期がやってくる。